

## 外国語学部における英語教育改善の歩み

竹蓋 幸生 草ヶ谷 順子 与那覇 信恵

### 1. はじめに

我々は、本学紀要創刊号に「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」と題する論文を発表した（竹蓋幸，竹蓋順，2001）。そこでは、千葉大学で開発された英語総合力養成用の指導理論の内容とその試用結果をまとめた上で、三ラウンド・システム（3R）が千葉大学だけでなく、本学を含め、一般的に全国の大学英語教育の改善策となりうる可能性を示唆した。さらに、3Rに基づいた指導は普通教室での教師による指導でも実践が可能だが、Computer-Assisted Language Learning（CALL）の形態での指導に適していることも示唆した。CALLでの指導は東京大学、京都大学、千葉大学をはじめ、数多くの大学英語教員の賛同を得るところとなり、平成14年度現在、少なくとも10校を超える大学で3Rに基づいた指導が、実践または試行されている。

本論文では、本学外国語学部において本格的に3Rでの指導実践を開始するにあたって行った準備作業、試行的指導実践の方法、その結果、および反省点についてまとめた。

### 2. 指導実践に向けた準備作業

本論文の筆頭著者は平成13年4月の着任であるが、着任前の平成12年9月13日と、着任後の平成13年5月22日に学内講演（Faculty Development）を依頼され、3Rによる指導とその効果について概説した。その後、平成13年7月には英語担当教員の会議が召集され、本学の英語教育の改善に関する論議の結果、竹蓋にCALLでの3Rによる英語教育の導入計画を立案するよう依頼された。この依頼にもとづいて竹蓋が作成した計画（竹蓋幸，2001）は、同年10月に開催された第2回英語担当教員の会議に提出され、討議の結果、平成14年度から3Rによる指導を竹蓋他4名が担当する1Aクラスに実験的に導入することが決定した。

#### 2-1. 指導理論の妥当性、信頼性、実用性の検証

3Rによる指導を導入することは決定されたが、教育の世界では「学生を実験研究のモルモットにしてはいけない」と指摘されることがある。裏付けのない指導理論で試行錯誤的に実験や指導をしてはならないという戒めであろう。極めて当然のことである。我々はこうした指摘をされないよう、本学への3Rの導入にあたっては細心の注意を払い、主観による「アンケート調査」と客観的な「データによる検証」という二方向からの妥当性他の検証を行った。

##### 2-1-1. アンケート調査による主観的検証

まず検証のために行った調査のひとつは、平成10年の文部科学省の科学研究費補助金の申

請にあたって、全国の大学英語教員を対象に英語教育法に関して尋ねたアンケート調査である（有効回答者数 100）。対象となった研究は「外国語 CALL 教材の高度化の研究」と題するものであったが、「高度化の基礎理論として 3R を採用すべきか否か」とのアンケート項目に「採用すべきである」と回答した教員は 82%（反対 3%，保留 15%）と高い割合であり、理論の妥当性は認められたと結論した（土肥他，1999）。

以下の3点の事実も、3R の指導理論としての妥当性が多くの識者の主観的評価で認められたことの補足説明として価値のあるものと言えるであろう。それは、1) 上記の結果を踏まえて、3R に基づいた CALL 教材を高度化、制作する研究を行うとして提出した科研の申請が採択されたこと、2) この調査に1年先駆けて、平成9年に文部科学省大学共同利用機関の「メディア教育開発センター」が開発する CALL 教材（外国語）の基礎理論として 3R が採用されていること、さらに、3) 開発された CALL 教材の使用効果に関する報告に対して千葉大学オープンリサーチ'99 でポスター賞を受賞したことである。

#### 2-1-2. データによる客観的検証

データによる検証は、次の3種の実験により行った。まず最初の実験は、教材の選定、動機づけ、使用設備、指導の方法、指導計画、学習環境等をほぼ理想的に設定した「実験室的条件下」の指導であるが、実質約 20 時間の学習により、4 組、延べ 21 名の被験者が平均で TOEIC 456 から 559 へと、103 上昇した（竹蓋幸，1997）。これら 4 組の実験では、上昇量の大きさもさることながら、異なる教材、異なる指導者、異なる被験者群で、繰り返し同様の成果が得られたことから、妥当性に加えて、3R はその信頼性（再現性）も検証されたと結論された。

その後、語彙力がそれほど高くない学生 3 クラスに、通常の授業計画の中で「CALL による自習」をさせた。この延べ 64 名の学生の場合には、半期の学習（約 70 時間）で平均 TOEFL-PBT 516 から 540 へと、24 の上昇が見られた（竹蓋順，2000：70 時間には語彙の補習のための時間が含まれている。また、自習であったためにあまり学習をせず、結果的に上昇量がマイナスになった学生のスコアもすべて含まれている）。この自習による学習実験も 3 年連続で、3 組の異なる被験者群に対して実施され、いずれもほぼ同様の効果が見られたことで、妥当性のみならず信頼性についても検証されたと結論した。また、学生の学習前のレベルが TOEFL-PBT 443～603 と幅広いレンジでばらついてはいたが、平均するといずれのレベルの学生も高い上昇を見せたことは 3R の実用性の高さを裏付けていると結論した。

この3年間の授業での指導実験に続いて、TOEIC 800 以上を記録しており、かつ、さらなる学習を希望した学生 10 名にはより難易度の高い 3 枚の CD-ROM 教材を貸与して自由に学習を続けさせた。その結果、約 6 ヶ月の「完全自習」で、3 枚の CD-ROM 教材による学習を終了した 7 名の学生の学習効果として、平均で TOEIC 844 から 916 へと 72 上昇した。TOEIC 800 レベルの学習者の英語力をさらに伸長させることは極めて難しいと言われるなか、この結果は特筆に値するであろう。

なお、上記の3種の実験的指導期間中に学生の到達した最高得点は TOEFL-PBT 647, TOEIC 930 であった(竹蓋順他, 2002b)。こうしたことから、3Rの理論としての妥当性、信頼性、および実用性は検証されたと結論した。

## 2-2. CALLの施設

理論の妥当性、信頼性、実用性が検証された後、CALLの場合、教材の使用が可能な施設を準備する必要がある。しかし、文京学院大学での3RのCALL授業は平成13年度にすでに自由科目の「TOEIC 高得点取得講座」で実施されていた。その際、主に使用した施設は、3R学習用として図書館の中2階に設置されたスタンドアローンのパソコン20台(エプソン Type-SA)であった。そこで、平成14年度の実験クラスでもその施設を活用することにした。これは、最先端の高度な機能を持たないシステムであるが、3R教材を使用する上での必要十分条件を満たしている。

## 2-3. 社会の要請と学習者の現状調査

本格的な指導実践のスタートには、カリキュラムの立案、検討が欠かせない。そのために、まず「社会」と「学習者」の両見地から、何が要請されているのか、どこからスタートできるのか等の調査を行った。

### 2-3-1. 社会の要請

日本の社会が大学を含む我が国の学校英語教育に期待しているものと言えば、平成14年7月12日に遠山敦子文科相が発表した「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」(文部科学省の公式ホームページ参照)などは、その内容を比較的具体的にまとめたものと言えるであろう。それによると、中学生、高校生、大学生、英語教員の英語力の到達目標はそれぞれ「英検3級」、「英検準2級または2級」、「仕事で使えるレベル」、「英検準1級、TOEIC 730 または TOEFL-PBT 550 程度」であるという。平成11年度の文部科学省科学研究費補助金の申請にあたり、我々が独自に作成したアンケートで観察された社会の要請でも同様の結果が得られている(土肥他, 1999)。要するに国際語としての、英語を使った「実用」コミュニケーション能力の養成が求められていると理解すべきであろう。

本学学生の要望にも大きな違いはない。英語コミュニケーション入門の授業で行われたアンケート調査で、本学を希望した理由として、「英語が使えるようになりたいので」と表明した学生は89%に達している。また竹蓋がクラス担任をしているクラスの学生18名のうち5名は、「TOEIC 800 を目標にしたい」、またはそのように大学案内に書かれていたので本学に入学を希望したと具体的に表明している。

## 2-3-2. 学習者の現状

一方、学生の英語力の現状については、平成14年6月のTOEIC-IPのスコア分布（外国語学部1年生161名）を図-1にまとめた。平均値は368で、13年度（外国語学部第1期生）のスコア分布と大きな差はなかった。仮にTOEIC730を目標とすると、4年間で362点、800点を目標とするならば432点の上昇が求められることになる。

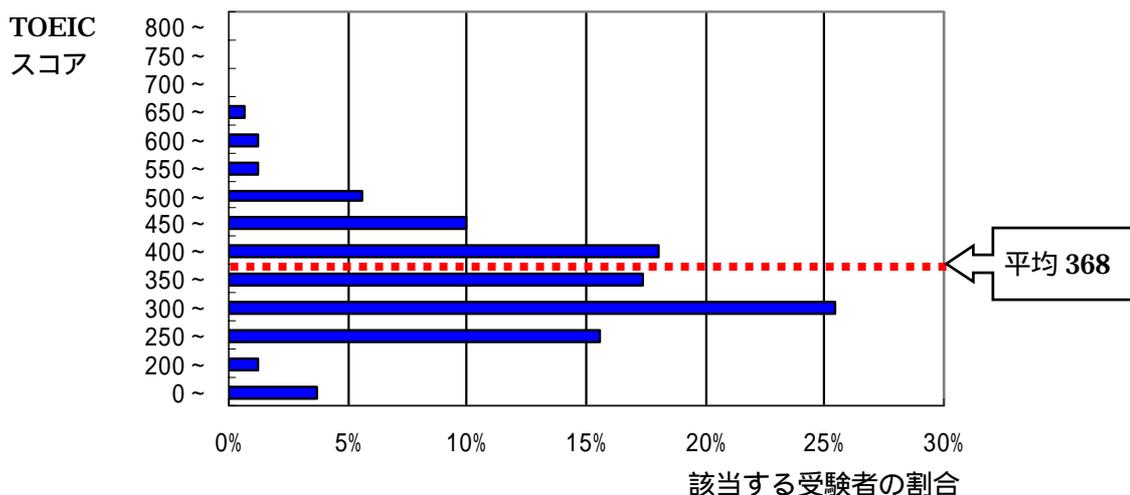


図 - 1 平成14年度 1年生 TOEIC-IP スコア頻度分布

次に、語彙力は、独自に開発した学習用語彙リストからランダムに抽出した語彙の理解度を観察することにより推定した。この「学習用語彙リスト」とは、日本人が必要とするであろう英語による言語活動例の英文素材を分析して得られた 頻度順に上位5,000語の語彙「Keyword System 5,000」(竹蓋幸, 1994)である。このリストの語彙はさらに認知レベルを基準に5レベルに分類してあるので、その中の「レベル1」から「レベル5」までのサンプル語(各24, 26, 25, 23, 25語, 計123語)を抽出して理解度を調査したものである。結果は表-1に示したが、外国語学部学生の語彙力の量的、質的傾向がこのデータから推測できる。

表 - 1 推定された外国語学部学生の語彙力の概要

レベル1 (中学必修語)	の語彙の理解度	81.2%
レベル2 (生活用語)	の語彙の理解度	58.2%
レベル3 (基本語)	の語彙の理解度	32.4%
レベル4 (中学高校教科書)	の語彙の理解度	16.0%
レベル5 (一般)	の語彙の理解度	11.7%

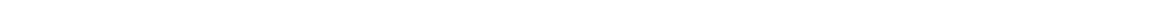
この調査の結果、本学外国語学部学生の語彙力は平均 1,801 語であると推定された。この語彙力は、学生の理解した語の累計頻度と 5,000 語すべての累計頻度との関係から推定されたものである。全国的に見ても、今日の短大生、大学生の語彙力は 1,500～2,000 語に過ぎないと指摘されている (Shillaw, 1995; 中西他, 1997; Borrow, Nakanishi & Ishino, 1999) ので、それから見れば 1,801 語という数値は平均的と言えるだろう。

続いて、この語彙力で日本人に必要と考えられる英語での言語活動を行うと、どの程度の割合で未知語に遭遇するかを求めた。その結果、「4.3 語に 1 語」未知語に遭遇することが推定され、実用力からは程遠いと言わざるを得ないことが判明した。実用の語彙力には 7,000～8,000 語が必要とされているので、現状からスタートすると、4 年間で 5,000 語から 6,000 語強の学習が求められることになる。

このようなデータからも、竹蓋幸、竹蓋順 (2001) でその必要を示唆した、効果的な語彙指導のための「複合システム」の整備の必要が見えてくる。

#### 2-4 . 主教材 (CD-ROM 教材) の整備

3R による指導の形態としては、指導法の中核部分 (コースウェア) を CD-ROM に搭載し、CALL を利用して指導する方法を選択した。しかし、それには未解決の問題が何点か残った。それは、学習者の興味と能力の「ばらつき大きさ」にいかに対処するかという問題である。

まず能力の面であるが、 - 1 に示したように、本学外国語学部の 1 年生だけでも TOEIC-IP で 165 点から 650 点までばらついている (90 パーセントの幅でも 250 点から 520 点と、270 点の幅がある)。一方、我々の研究 (土肥他, 1999) によれば、学生の能力と教材の難易度との間に TOEIC で 100 点のズレがあると学習効果が約半分に落ちることが判明している。したがって高い効果を期待するのであれば、難易度レベルの面だけを見ても、たとえば TOEIC スコアで 50 きざみに、6 種類程度の教材を準備することが望まれることがわかる。

しかも教材の内容に対する興味が、難易度に匹敵する大きな影響を学習効果に与える可能性のあることも、心理学における諸研究、およびアンケート調査のデータ分析等から明らかになっている。これらのことを考慮すると、我々の推定では、効果的な大学英語教育の実践には骨格だけでも 25 種類 (能力対応 5 種類×興味対応 5 種類) の教材が必要 (竹蓋幸, 1997) と推定されているわけであるが、現状では表 - 2 に示した 8 種の教材で対応している。このため、とくに中級レベル (TOEIC 300～400, 400～500) の学習者向けの教材不足が問題になっている。

このようなデータからは、竹蓋他 (2001) に示唆された、3R における「総合システム」整備の必要も見えてくる。

3R による効果的な指導を可能にする教材整備のための CALL 教材制作には鋭意継続の努力がされている。しかし、CD-ROM 教材 1 枚の制作に約 1,500 万円の予算と、4～5 名の熟練教材作成要員が必要で、しかも延べ 1,000 時間を越える作業が必要になるので、容易には要望に

応えられない状況である。

表 - 2 3R に基づいた CALL 教材一覧

主 教 材 名	レベル	特 徴
First Listening	初級 250 程度	読み書きや文法は勉強してきたけれど、聞いたり、話したりするための学習はまだあまりやったことがないという方のための教材。日常会話、公共のアナウンス、ユーモアの聞き取りなど、トピックやジャンルは多岐にわたる。
Introduction to College Life	初中級 500 程度	カリフォルニア大学バークレー校で、教授、学生、大学関係者に取材をした動画素材を扱っている教材。アメリカという国の活力源となっている大学教育はどのような雰囲気の中で行われているのかがわかる。外国語の科学的な学習法についてのアドバイスも多く含まれている。
College Life	中上級 650 程度	Introduction to College Life 同様、カリフォルニア大学バークレー校へ撮影取材して収集した動画素材を教材化したもので authentic な英語を扱っているが、「Introduction to College Life」を学習させた後だと「College Life」への移行が比較的スムーズになるように作成されている。
College Lectures	上級 700 程度	アラバマ大学で収録された講義を素材としており、まとまった長さの講義を聞き、理解する力が養える。講義内容としては、Marketing と Digital Signature を扱っているが、いずれもイントロダクションのレベルなので、それらの分野の専攻でない方でも十分に勉強になる。留学をめざす学生、研究者、社会人を対象とした上級レベルの教材。
People Talk	上級 700 程度	アラバマ大学へ撮影取材して収集した動画素材を教材化したもので、大学キャンパスでの日常会話力を養うのに最適な教材となっている。留学をめざす学生、研究者、社会人を対象とした上級レベルの教材。
TV-News	上級 750 程度	NBC ニュースで放映された、政治、経済をはじめ、人々の関心を集めている社会問題、医療問題など、幅広いトピックのニュースが教材となっている。ニュース特有の表現方法等を学び、リアルタイムでニュースを聞けるようになりたいという人には最適の教材。

Movie Time 1	上級 750 程度	映画「It's a Wonderful Life (素晴らしき哉、人生!)」を素材として作成された教材。心優しく、他人のために尽くす主人公ジョージの半生が描かれている。製作は 1946 年、モノクロ映画ではあるが、現代でもこの作品の素晴らしさ、親しみやすさが人気を集めており、アメリカ映画の傑作の一本に数えられている。
Movie Time 2	上級 750 程度	「Movie Time 1」の続編教材。2枚で学習が完了する。
College Life (平成 15 年 完成予定)	上級 750 程度	「Introduction to College Life」「及び「College Life」同様、カリフォルニア大学パークレー校へ撮影取材して収集した動画素材を教材化したもの。大学生最上級レベル用であるが、「Introduction to College Life」「College Life」を終了した後だとスムーズに学習ができるように構成されている。

表中の「レベル」に書かれている数字は TOEIC スコアを示す。ただし、学習者のもつ語彙力や文法力、素材内容に対する興味等によっても変わってくるため、この数値はおおよその目安と捉えていただきたい。

## 2-5. 副教材の整備

CALL を使用した 3R による指導を導入すること自体は会議で承認、または依頼されたとしても、以上で指摘したように、現在では主教材の絶対数が不足している。そこでとられた対応策は以下の 3 種であった。

方策 1: 学生を「能力別に編成」し、当面は、既存の教材の難易度に合う学生のみにも 3R による指導を行う（これが本年度 1 クラスのみに実験的指導を行っている理由である）。

方策 2: 数少ない CD-ROM 教材（主教材）を、より幅広い能力レベルの学生に使用させても高い効果を得られるよう「補助教材を作成」すること。作成した補助教材は表 - 3 に示す。

方策 3: 教材の種類を主教材以外のものでも補充する方策である。作成、または収集した「副教材」は表 - 4 に示す。

表 - 3 主教材を効果的に活用するための「補助教材」

教材名	補助教材
First Listening	教材中の語彙・フレーズの予習、復習用テキスト (MD 音声付)
	隔週実施するための語彙テスト<記述式> (MD 音声付)
	隔週実施するための内容確認テスト<記述式> (MD 音声付)
	復習のための教材英文スクリプト (MD 音声付)

Introduction to College Life	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 毎週実施するための語彙テスト<選択式> 毎週実施するための内容確認テスト<選択式> 毎週実施するための語彙テスト<記述式> 毎週実施するための内容確認テスト<記述式> 復習のための教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付) (MD 音声付) (MD 音声付) (MD 音声付)
College Life	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 毎週実施するための語彙テスト<選択式> 毎週実施するための内容確認テスト<選択式> 復習のための教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付) (MD 音声付) (MD 音声付)
College Lectures	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 復習用の教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付)
People Talk	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 復習用の教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付)
TV-News	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 復習用の教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付)
Movie Time 1	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 復習用の教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付)
Movie Time 2	教材中の語彙・フレーズの予習，復習用テキスト 復習用の教材英文スクリプト	(MD 音声付) (MD 音声付)

表 - 4 主教材を補充するための「副教材」

動機づけ用
国内での英語学習に対して種々の困難がある中で，効果的に「動機づけ」を行うための副教材（ビデオ映像資料）である。本年度準備したものとしては，1）目標の設定，2）国際化社会での英語の重要性認識，3）言語学習の重要性と困難さの認識，4）3R の理解，などを目的としたもの，延べ7種がある。
「初級レベル」学習者用副教材（兼 発信型英語の学習用補助教材）
主教材の <i>First Listening</i> 以下のレベルの教材が必要なケースに使えるものである。このレベルの副教材には Repeat Learning System 教材(SONY:非3R教材)8種,ASK Kodansha の教材(ミニCD 4枚&テキスト:3R教材)1種,CD-ROM教材(非3R教材)4種の,計12種がある。Repeat Learning System 教材の使い方については椎名,竹蓋(1993)なども参考になろう。

「中級レベル」学習者用副教材
<p>主教材の <i>First Listening</i> と <i>Introduction to College Life</i> の間を埋めるものと言える。また、パソコンでの学習はどうしてもいやだという学習者にはこのようなものを使用して学ぶのもよいであろう。このレベルの副教材は書籍教材（音声 CD &amp; テキスト：3R 教材）3種、ASK Kodansha（ミニ CD5 枚 &amp; テキスト：3R 教材）1種、そして CD-ROM 教材（3R 教材）2種の、計6種がある。</p>
「中・上級レベル」の ESP 学習者用副教材
<p>とくに「ビジネス」、「医学」、「理系科学」の各分野での英語力をつけたい学習者用である。書籍教材（ブリタニカ：音声テープ 1～15 &amp; テキスト）1種と CD-ROM 教材 3種の、計4種がある。</p>

主教材および付属の補助教材が一般的な「総合力養成用」であるため、高等学校までの英語教育で十分な「文法力や語彙力」をつけてきていない最近の学習者にはその分野の補充指導が欠かせない。それに、強化（reinforcement）のための評価や、診断的評価、到達度評価のための評価用資料も必要になる。副教材は、そのような目的のために使われるべきものである。上記、表 - 4 以外の副教材としては、1) 文法事項自習用副教材 3種、語彙力増強用副教材 10種、語彙力判定用副教材（音声テープ、テキスト）5種、総合力評価用資料（音声テープ、解答と解説）10種、等がある。

上記の補助教材、副教材の詳細な内容、リストについては「文京語学教育研究センター教材リスト」を参照されたい。

### 3. 試行的指導実践：平成 13 年度の指導実践

平成 14 年度以降の 3R による本格的な授業開始のための準備作業と併行して平成 13 年度には試行的な指導が行われた。本学外国語学部の授業科目には他大学同様、必修の課目、選択必修の科目、それに自由科目があるが、その中の自由科目のひとつ「TOEIC 高得点取得講座」に 3R による指導が試行的に導入されたものである。担当者は竹蓋であった。この科目での授業形態としては、授業中は主に担当教員による学習への動機づけと語彙指導が行われ、加えて、今後の本格的な指導に備えた実態調査を目的とするミニ・テストや、学生の希望調査のためのアンケート調査等が必要に応じて行われた。3R による学習はすべて授業時間以外に図書館の CALL 設備を利用して自習するよう指示された。

カリキュラム上のこの科目の大きな特徴は、1) 6 時間目（17:10～18:30）という遅い時間帯に開講される、2) 受講生の学年、人数、レベルに制限がない、3) 履修しても卒業単位にならない、という形でスタートした。これらの特徴は学習の容易ではない外国語力の養成を目指す授業には望ましいものではないにも関わらず、受講希望者の数は多く、1クラス 63 名で

スタートした。学習者の英語力養成の願望は高いということであろう。しかしながら、当初から懸念されたように、必修科目の定期試験やレポート提出が近づいたり、集中講義と重なるなど様々な理由で欠席が多く、こちらの準備した授業計画通りには進められない科目であった。学生からもこのような形態で行われる科目には強い批判が出たため、単位についてのみ、年度の終了間際に自由科目の単位のうち4単位を限度として卒業単位として認めることが教授会で決定された。しかし、当該年度における指導のしにくさを解消することはできなかった。そのような条件ではあったが、本年度のTOEIC高得点取得講座の受講生が大幅に増えたことを見ても、また以下のアンケートによる調査結果を見ても、学習者には3RのCALLによる学習が比較的好意的に受け入れられたことがわかる。

#### 4. 指導実践の結果：平成13年度の指導実践の結果

平成13年度のTOEIC高得点取得講座での指導効果については、実験計画をたてて実験群と統制群を作りその効果を比較検討したわけではないので、3Rによる指導に起因すると考えられる効果を厳密に観測することはできなかった。学生の側としても、当初は制限の多い自由科目の授業での学習、コンピュータを使用した、また3Rというこれまでの学習法とは大きく異なる学習法に戸惑いも大きかったようである。このことは、アンケート調査による自己申告で、「3Rで真にまじめに勉強できた」、「勉強が形式的になってしまった」、「勉強らしい勉強はできなかった」学生の割合がそれぞれ11%、84%、5%であったことなどからも推測できる。千葉大学で同様の調査をした結果では、それぞれに59%、26%、15%であったので、学習環境がいかに学生の学習態度に影響するかは明白である。

業者の作成したCALL教材の学習履歴プログラムにバグのあったこともあり、残念ながら、予定していた「学習時間、それに学習パターンとCALL学習の効果との関係」も厳密なデータは取ることができなかった。

しかしながら、1年間の学習中に実施されたアンケート調査の結果(表-5)から、学習者の3Rに対する評価をある程度読み取ることができる。成就感に対する回答以外はすべての項目で90%以上の高い割合の肯定的回答となっている。唯一の例外、成就感の87%にしても、アンケートを実施した時点で学習時間が正味10時間以下の者が33%いたことを考慮すれば、87%の数值は決して低い数值とは言えない。また偶然かもしれないが、「私はもう10時間以上この方法で勉強した」という項目に肯定的回答をした学生の割合と「勉強を始める前よりも聞く力がついてきたという実感がある」という項目に肯定的回答をした学生の割合がともに66%で、一致していた事実からもこの推測の正しさが裏付けられる。上記アンケートの結果をまとめると、TOEIC高得点取得講座の3Rによる指導は高く評価されていると結論できるであろう。他に、「指導法」に関する否定的意見として、「話したり書いたりしないので不安だ」(92%)と、「もっと文法を勉強したい」(68%)の意見があったが、これは、「四技能の効果的な学習

のために望まれる学習の順序」,「転移の方向性」,それに「負荷過大を避ける方策」,「母語の習得における習得順序」といったことを論理的に考えれば,書いたり,話したりの学習は後回しになっても致し方がないということを知るべきであるし,「文法の学習」にしても,その行きすぎた指導のために英語を嫌いな学科の1位または2位にしていること,しかも母語の使用に際して誰も文法的知識をほとんど必要としていないことを考えれば,十分でないように見えることでも必要以上に不安に感じたり,望んだりすべきでないことをむしろ学習者の方が知るべき

表 - 5 肯定的回答の多かった項目のまとめ

評価項目	質問項目数	肯定的回答者の割合
教材や指導法に対する評価	4	97 (%)
成就感に対する評価	11	87
授業内容に対する評価	4	90
学習環境「図書館」に対する評価	2	92
パソコン使用に対する評価	3	91
TOEIC 高得点取得講座に対する評価	3	90
平均		91

であろう。日本の英語学習者の学習法を自転車の乗り方の学習に例えて,「実際に乗り方を練習するより説明を読むだけで乗れるようになって思っている」,「ボルトやナットのことを知っても自転車に乗れるようにはなれないのに」と言って批判している Steve Soresi 氏 (1999) の発言も参考になる。

次に,自由筆記の意見の代表的なものを以下に記す。

- 1) 同じ文章を繰り返し聞くことにより内容をとらえられるだけでなく,発音やイントネーションまで聞く余裕がもてるようになったと思う。文章の読まれるスピードが速くなり,長くなるにつれて英語の単語を一度日本語にもどして理解するということが少しずつ減り,英語を英語として捉えられるようになってきたと実感した。Unit 6 までやり終えて,次へ行く楽しみを感じています。この教材なら毎日続けられると思いました。
- 2) 最初は教材は普通に本屋で売っている教材を使うのだと思っていた。あまり意味はないかな...と思いつつ授業を取得してみたら「三ラウンド」というパソコンを使った授業でとてもびっくりした。でも自分のやる気次第でどんなことでも出来るんだということに気づいたし,やればやるだけ英語が聞けるようになるのがとてもうれしい。それに,自分のペー

スで焦ることなく勉強でき、内容も少しずつ繰り返すことによってたくさんのことを得られているということに日々気づくことが出来た。この授業はみんなに勧めたいと思うけど、でも人数が多くなるとパソコンを使う時間も少なくなるし、みんなが取得していない間に点数を上げたいと思う。本当はさぼりたいと思う時もあるけれど、木曜日の授業で先生からさまざまな話を聞いた時“がんばろう”という励まされている気がする。誰のためでもなく自分のために点数が上がると信じてがんばろうと思う。一日30分は学習しています。いまはUnit6の最初です。夏休みは実家(福島)に帰るので、CD-ROMを貸して頂けると嬉しいです。

- 3) 三ラウンドをやっていると時間が経つのがすごく早い。授業だったら早く終わらないかと思って時計を見るのに、三ラウンドは違う。やっていて退屈になりません。最近、*College Life*に入って、生の英語という感じで楽しくてしょうがないです。それと同時に、三ラウンドを始めて三ヶ月くらいしか経っていないけど、前よりも聞き取れるようになった気がする。自分で実感できるので、これからもっと頑張っていきます。夏休みに図書館が使えないのは残念です。
- 4) 最初はコンピュータで授業をやるという事に不安を感じていたけれど実際にやってみると自分のペースでできて、ヘッドホンをつけるので集中できたし、おおまかなところから始めていって何回も繰り返し聞くことができるから、手からではなくて耳から単語やフレーズが覚えられるようになった。トピックも身近な話題ばかりで現実的でなじみやすいと思う。特にユーモアのトピックなんかは、思わず笑ってしまった。そのくらい集中してしまう。
- 5) この授業を受けはじめてから約3か月。TOEICの得点を上げたいという気持ちはすごくあったが、どうしたらよいのか悩んでいた時、この大学に入ってこの授業を選んで勉強している自分は幸せだなあと思います。TOEIC800点なんてウソっぽいというのが最初の印象です。でも、先生の話聞き、はげまされ、実際に三ラウンドで勉強していると、自信がきます。“毎日コツコツ”の勉強で、目指す得点に近づいているのか、実感はないけれど、少なくとも、“自分は毎日頑張っているんだ”とか“TOEIC800点とるんだ!”とかいう自信、また信頼がもてます。外国語学部が設置され、私達は第一期生です。これからのこの大学、私達の母校の為、なによりも自分の為ががんばっていこうとおもいます。

このように具体的に表明されている学生の意見からみても、我々は3Rが着実に文京学院大学の英語教育として根づきつつあると結論した。

## 5. まとめと提言

文京学院大学で、平成14年度からスタートした3Rによる英語教育改善の試みに関連した準備作業の概要を報告した。実験室で行う教育研究と異なり、全学の学生の授業改善には考察すべき要因の種類と量が格段に多い。そのことが吉川弘之氏に「自分の研究領域に関連する科目を、いかに教育するか、どうすれば学生の学習が効果的に進められるか、などについて考察を進めることは、基礎研究にほかならない」、「教育についての研究が、もっと多くの研究者によって、とくに大学の各専門領域の研究者によって行われる必要がある...そして当然のことだが、この種類の研究に、もっと積極的に高い評価を与える必要がある」、「教育についての研究は他の研究に較べ、成果をだすまでに長い時間がかかる。従って、教育に関する優れた論文は、一般の研究の5篇分くらいの価値を認めるべきではないだろうか。」などと言わしめた理由であろう。

本学の英語教育改善の試みも、これからCALL教材の追加作成、未完成の「複合システム」、「総合システム」の完成、中でも全担当教員の協力を必要とする「包括システム」の完成までには道のりははるかに遠い。しかし、それらをできるだけ早く完成して学生に十分な国際語としての英語力を養成することは我々外国語学部教員に課せられた義務であろうと考える。

## 6. 参考文献

- Borrow, J., Y. Nakanishi & H. Ishino, "Assessing Japanese College Students' Vocabulary Knowledge with a Self-checking Familiarity Survey," *SYSTEM*, No.27, 1999, pp.223 - 247.
- 土肥充, 椎名紀久子, 竹蓋幸生, 「CALLの現状分析とコースウェア開発における今後の課題」, 『言語文化論叢』, 第6号, 千葉大学外国語センター, 1999, pp.147 - 171.
- 編集部, 「メディア教材紹介」, 『New教育とコンピュータ』, 5月号, 2001, pp.102 - 105.
- 中西義子, 石野はるみ, Jack Barrow, 「日本人学生の Vocabulary Familiarity Test に関する一考察」, 『大学英語教育学会(JACET)第35回全国大会要綱』, 1996, pp.365 - 368.
- Shillaw, J., "Using a Word List as a Focus for Vocabulary Learning," *The Language Teacher*, 1995, pp.58 - 59.
- Soresi, S., LIFE, *Asahi Evening News*, September 11, 1999.
- 竹蓋順子, 「大学英語教育における複合システムの実践的研究」, 『言語行動の研究』, 第7号増刊号, 千葉大学, 2000.
- 竹蓋順子, 岩崎洋一, サンドラ・リーシュマン, 『英会話3STEP リスニング』, 竹蓋幸生(監修), (株)語研, 2002a.
- 竹蓋順子, 竹蓋幸生, 高橋秀夫, 土肥充, 「英語総合力養成のためのCALL教材の開発とその試用—科学研究費補助金による研究—」, 『ARELE』, 第13号, 全国英語教育学会, 2002b, pp.199 - 208.

- 竹蓋幸生,「語彙リスト『現代英語のキーワード』 - その開発と有効度の検証」,『千葉大学教育学部研究紀要』,第42巻,1994,pp.253 - 267.
- 竹蓋幸生,『英語教育の科学』,アルク,1997.
- 竹蓋幸生,「文京女子大学外国語学部英語教育改善計画(案)」,2001,(文京語学教育研究センター資料) pp.1 - 15.
- 竹蓋幸生,文京語学教育研究センター - 「自己点検評価報告書 その1:点検編」,2001a,(文京語学教育研究センター資料), pp.2 - 24.
- 竹蓋幸生,文京語学教育研究センター - 「自己点検評価報告書 その2:評価編」,2001b,(文京語学教育研究センター資料) pp.2 - 32.
- 竹蓋幸生,文京語学教育研究センター - 「自己点検評価報告書 その3:提言編」,2001c,(文京語学教育研究センター資料) pp.2 - 17.
- 竹蓋幸生,竹蓋順子,「新しい英語教育『三ラウンド・システム』」,『文京女子大学外国語学部・文京女子短期大学紀要』,創刊号,2001,pp.1 - 15.
- 竹蓋幸生,「文京学院大学大学院 英語コミュニケーション教育研究科(修士課程)構想案」,2002,(文京語学教育研究センター資料).
- 竹蓋幸生,他,「外国語CALL教材の高度化の研究」特定領域研究(A)『高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究』,2002,pp.241 - 269.
- 竹蓋幸生,草ヶ谷順子,与那覇信恵,「文京学院大学外国語学部英語教育改善報告 - 平成13年度分 - 」,2002,(文京語学教育研究センター資料).
- 吉川弘之,「工教言:教育法の研究」,『工学教育』,第47巻1号,1998,p.1.